

『塔の上の二人』論

——ハーディの科学に対する意識の変化——

遠藤利昌

(受付 2012年10月30日)

序

トマス・ハーディ (Thomas Hardy) の9作目の長編小説『塔の上の二人』 (*Two on a Tower*, 1882) は、しばしばこの物語の重要なテーマである天文学がうまく作品中に取り入れられていないという批判を受けてきた。例えば、F. B. ピニオン (F. B. Pinion) は、「物語の中で、人間と天体が感情的、想像的に統合されることはほとんどないと言わざるを得ない」 (Pinion, 183) と述べ、天文学というテーマと登場人物が有機的に統合されていないことを指摘している。あるいは、リチャード・H・テイラー (Richard H. Taylor) は物語の舞台との関係で、「(天文学という) 題材が想像的に転換される必要があるが、実のところ、それが欠けている」と述べたあと、『帰郷』 (*The Return of the Native*, 1878) や『森林に住む人々』 (*The Woodlanders*, 1887) におけるエグドン・ヒース (Egdon Heath) や森林のように、『塔の上の二人』では天体というテーマと物語の舞台とが上手く結び付いていないとしている (Taylor, 129-130)。

こうした批判の原因は、『塔の上の二人』の主人公であり、天文学という科学に従事するスウィジン (Swithin St. Cleeve) を通して、ハーディが科学をどのように扱おうとしているのか不明瞭なところがあるからではないだろうか。ハーディはエドモンド・ゴス (Edmund Gosse) に宛てた手紙の中で、この小説の目的について、「私が目的としたのは、科学を単なるロマンスの詰め物にするのではなく、ロマンスの実際的な媒体とすることだ」と述べ、スウィジンと、年上で既婚の女性であるコンスタンティン夫人 (Lady Constantine) のロマンスが発展していく過程で、「科学」に何らかの実質的な影響力なり推進力を持たせようとしたとしている (*Letters*, 110)。つまり、この物語は科学によって二人のロマンスがどうなっていくかが重要なポイントとなっているのだ。さらに、1895年に付した『塔の上の二人』の「序文」の中で、ハーディは次のようにも述べている。

この軽く構成されたロマンスは、途方もなく広大な星の世界を背景として、微小な存在である二人の人間の感情の物語を対置してみると、こうした対極的な両者のうち、矮

小な彼らの方が人間として偉大に思えてくることを読者に伝えたいという願いから生まれたものだ。(289)

物語中盤、スウィジンは盲目的なほど天文学一筋だった生き方から、コンスタンティン夫人への愛情に目覚める。彼が夫人への愛情に目覚め、天文学をきっかけとして二人が結び付けられていく姿は、「途方もなく広大な星の世界を背景として、微小な存在である二人の人間の感情の物語」が展開され、二人の人間としての対照的な偉大さが描かれていると言い換えることができるだろう。

ところが、こうして二人が科学によって結び付けられたにも関わらず、この目覚めを境に物語が後半に入ると、スウィジンの科学者としての合理主義や冷淡さに関する語り手のコメントや、さらには、そんな彼にはコンスタンティン夫人の感情など理解できないという批判的なコメントが急激に増えていく。つまり、物語前半で二人を結び付けた科学が、後半に入った途端に、二人を引き裂く原因になってしまうのだ。だがそれは同時に、果たしてスウィジンは「二人の微小な人間」の一人として「対照的な偉大さ」を持つ人間に値するのだろうか、という疑問が出てくることにもなるだろう。さらには、「ロマンスの実際的な媒体」にしようとした科学を、ハーディがどう捉えているのか不明瞭にしてしまう結果にもなっているのだ。

テイラーなどの少なからぬ批評家は、こうした変化後のスウィジンの姿を批判する語り手のコメントを受けて、ハーディがスウィジンという科学者の姿を通して科学の行き過ぎた合理主義を批判的に描いているとしている。だが、この物語をスウィジンという科学者を通して示されるハーディの科学批判として理解したとしても、前半で確かに示された「二人の微小な人間」の偉大さとは何だったのかという疑問は残ることになるだろう。ミルゲイト (Michael Millgate) は、この物語は「天文学のイメージ」が「異質なもの」で「出来合いのもの」になってしまっていると、テイラーやピニョンと同じような指摘をしつつも、本作の「天文学という題材とイメージの統合」は言われているよりもできており、前半部分は十分に「独創的な力」があるとしている (Millgate, 189)。ミルゲイトは、この「独創的な力」は後半に入ると急激に下がってしまうとしているが、もちろん、物語の前半と後半に優劣をつければ、この物語でスウィジンの扱い方が変化している問題が解決するわけではない。本論では、スウィジンとコンスタンティン夫人を結び付け、引き離しもする科学という存在を用いて、ハーディが何を示そうとしたのか、もう一度、この『塔上の二人』における科学の役割を検証し直していくことで考えていきたい。そして、ハーディはこの物語で単に科学を批判しようとしているのではないことを示したい。加えて、しばしば批判の対象となる結末でのコンスタンティン夫人の死の意味についての見解も示すことができればと考えている。

I

ハーディは幼少のころから天文学に興味を持ち、詩「私が出て行ったあと」(“Afterwards”) で「彼はそのような神秘にもよく目が届く人だった」(*Complete Poems*, 553) と述懐している通り、想像力を刺激されて詩の題材にもしていた。1866年に作成したとされる「幻の中を私はさまよった」(“In Vision I Roamed”) も、小説の執筆に乗り出す以前の、そうした初期の創作のひとつである。この詩の中の詩人は幻想の中で宇宙を彷徨い、その広大な「戦慄すべき空の高み」で「畏怖の念を感じた」かのように、半ば魅了され、半ば宇宙に飲み込まれたような状態にいる。そして一切の光が消滅した宇宙の果ての、闇が支配する世界にまでやってきたとき、彼は故郷である地球の素晴らしさに気づき、「地上のどんな場所も我が家に思えてきた！」と叫ぶのだった。なぜなら、「あなたが遠くにいるというひどい悲しみが／近くにいるという喜ばしい感謝の念になった」からであり、地球にいれば「あなた」が側にいるという喜びに気付いたからだった (*Complete Poems*, 8-9)。このように、若きハーディは「幻の中を私はさまよった」という、天体を背景にして人間的な愛情の目覚めを高らかに詠った、ロマンティックな恋愛詩を描いている。

『塔の上の二人』の主人公で天文学に没頭する若き科学者スウィジンも、この詩と同様の過程を経てコンスタンティン夫人への愛情に気付くことになる。ハーディが「幻の中を私はさまよった」と同様の気づきに至るスウィジンの姿を描こうとしたのは間違いないだろう。スウィジンは天体について、次のようなことを言っていた。

「長時間、観測用の椅子に座っていたあとに、しばしば天空に対して一種の恐怖心を経験します」と彼は答えた。「そのあと家に帰るときも怖いのです。だって、ぼくが知っているものがそこにあるのに見るができないのです。それはまるで、それ自体ほんの少ししか姿を見せない巨大で形のない何ものかの存在が、当然、怖くなるようなものです。あるところでは壮大だったとしても、それを超えてしまうと、ぞっとするようなものになるという、あの大きさのことについてお話ししたときに言おうとしていたことでもあります」(57)

スウィジンは無限の天体を観測していると恐怖心を抱くと打ち明け、「ぞっとするようなもの」を感じると言う。それは「幻の中を私はさまよった」で示されたのと同じような宇宙の危うい魅力と、その先にある恐ろしさを表している。詩人は宇宙の魅力に呑み込まれてしまっている間、「来る日も来る日も／私は全てを気にもかけずに生きていた／寡黙で荒涼としたあ

の宇宙に閉じ込められて」と、地球にいる「あなた」の存在を「気にもかけず」、「欲望の対象」以下でしかなかったと打ち明けていた (*Complete Poems*, 9)。当初、スウィジンは天文学に夢中になるあまり、コンスタンティン夫人が秘かに寄せる一方ならぬ彼への関心に全く気付かなかった。しかし、それに気付いた彼は、「それは一ひとつの覚醒です。頭上にある天体のことを考えて気付かなかったのです……もっと素晴らしい天国がその下にあることに」(81) と述べ、「(あなたが) 近くにいることに喜ばしい感謝の念」を抱く詩人と同様の目覚めを経験する。そして彼は夫人と階級の壁に抗ってでも、秘かに結婚する決断をするに至るのだった。語り手が、この前半のクライマックスの場面について、「天体物理学の研究は、八か月と二週間と数日で、二人をこんな状況に至らせることとなった」(98) と述べている通り、ここにはハーディが科学を「ロマンスの実際的な媒体」として「二人の微小な人間の感情の歴史」を描こうとしたという、まさにその「二人」の姿が描き出されている。ハーディが1866年に書いたとする「幻の中を私はさまよった」と同様に、その15年近く後に書いた『塔の上の二人』も、その前半に関する限り、このように天体を背景としたロマンティックな愛の賛歌とすることができるのだ。

だが一方で、ジェームズ・パースン (James Persoon) が「幻の中を私はさまよった」について次のように指摘している通り、この詩は、そうした気付きに至るまでの人間が、人間らしさを失った不気味な存在にもなり得ることも示している。

私たちは宇宙と同じくらい無感覚で無関心になる可能性がある。愛もなく、「気にもかけず」にいる人間は、彼、あるいは彼女が閉じ込められている、あの宇宙という箱と同じくらい気にもかけず／無意識になってしまい、死んでいるのも同然になってしまう。そうした「ひどい悲しみ」のような感情を掻き立てる愛がなければ、私たちは無意識で無関心な宇宙の無意識で無関心な一部分になってしまうのだ。こうして我々の生きる宇宙の非人間的な性質を強調しながらも、この詩は不可欠な人間的性質として愛を高めてもいる。(Persoon, 26)

コンスタンティン夫人に出会う前、天体にのめり込んでいたスウィジンは、まさにパースンの言う人間的感情を喪失した「無意識で無関心な宇宙の無意識で無関心な一部分」になってしまっていた。だとすると、そんな彼がコンスタンティン夫人への愛情に目覚めることは、一見、この「無意識で無関心」な状態から抜け出して、「不可欠な人間的性質」である地上のものへの愛情を示すことができるようになったと思えるかもしれない。しかし、「幻の中を私はさまよった」中の詩人の場合とは違い、この時のスウィジンの気付きは、あくまでも夫人とのロマンティックな恋愛感情に気付いただけで、それ以上の人間的な感情を理解でき

ているとは言えないものだ。この時点での二人の関係は、どこか非現実的で夢物語的なところがあり、例えば、ノーマン・ページ（Norman Page）はこの物語を「寓話かおとぎ話」（Page, xix）であるとし、主人公であるコンスタンティン夫人のことを「おとぎ話、あるいはロマンスと神話に大きく依存したキーツやテニソンの詩から飛び出してきた人物」であり、「シャーロット姫」（“Lady of Shalott”）や「マリアナ」（“Mariana”）のようなロマンス詩に登場する、塔に監禁された女性の系譜に属すると述べている（Page, xxi）。実際、秘密結婚のためにバースで落ち合った二人の幸福そうな姿は、「二人にとって、この状況はまるで美しい寓話のように思え、現実の生活とはかけ離れたものであることが明白にならないように、あまり細かく吟味してはいけないものだった」（116）とされ、現実離れした関係だということが強調される。このように、物語前半での二人の結び付きは、あまりにロマンティック過ぎて、スウィジンが「頭上にある天体」からその下にある地上の「天国」に気付いたと言うよりも、塔というスウィジンのいる「おとぎ話」の世界に、夫人が昇っていったと言うべきものなのだ。

この後、これまでスウィジンのロマンティックな気付きに至るまでの姿を肯定的に描いていると思えた語り手が、掌を返したように科学者スウィジンの人間性批判を開始する。曰く、「彼は求愛においてすら、ある種の科学的で実用向きなところがあった」（97）のであり、「詩情に富んだ文学的精神」（116）に欠けており、「そうした男たちの容赦のない単純な論理には、彼らの研究対象である自然の法則の残酷さを帯びた何かがある」（260）のだった。結局のところ、こうした語り手による批判も、前半部分でのスウィジンの気付きが、本当の意味での人間的な感情の目覚めとは言えないとすれば、「司祭」として崇められる天文学者から、地上の「科学者」として批判される対象へとスウィジンを見る語り手の視点が変わっているだけで、科学に従事する彼の本質的な変化を意味していないと言うべきであろう。彼がこの時のロマンティックな目覚め以上の「不可欠な人間的性質」を身に付け、コンスタンティン夫人の感情を理解できるようになるには、まだまだ人間的に成長をする必要があるということだ。つまり問題は、スウィジンが塔を降りて本当の意味での目覚めに達することを妨げ、人間的な成長を遂げることを阻止しているものは何なのか、そしてスウィジンを見る語り手の視点の変化は何を意味しているのかということになるのだ。

II

ハーディは『塔の上の二人』より五年ほど前の作品である『帰郷』の中で、クリム・ヨープライト（Clym Yeobright）の顔のことを次のように述べていたことは有名である。

クリム・ヨーブライトの顔には、未来の典型的な表情がかすかに見てとれた。今後、芸術に古典時代があるとすれば、その時代のフェイディアスはこうした顔を作るかもしれない。人生は耐えるべきものという考え方が、初期の文明には強かった存在への熱意に取って代わり、最終的には先進民族の体の中に完全に入り込んでしまうに違いなく、この表情が新しい芸術の出発点として受け入れられることになるだろう。一切、顔の曲線を乱したり、精神的な心労の印を体のどこかに表したりすることもなく生きている男は、現代的な感覚から離れ過ぎていて、とても現代的なタイプとは言えないことを人々はすでに感じ取っている。肉体的に美しい男は一民族が若いときは、その民族にとっての榮譽になる存在だが—今では時代錯誤になっている。そして肉体的に美しい女も、いつかは、同じように時代錯誤になるのではないかと思ってしまうのだ。(The Return of the Native, 167)

スウィジンは「ギリシア古典の時代」(7)に生きていれば名声を得た美しさを持つとされ、ある時は「アンティノス」(39)であり、またある時は「アドニスのような天文学者」(48)、あるいは「科学者のアドニス」(171)と譬えられ、「まるで古代ギリシアから直接、やって来たかのような若者」(152)と呼ばれる存在である。さらに、その顔色はラファエロが描いた洗礼者ヨハネに準えられるほどの美青年であり、ハーディが『帰郷』で言っていた「初期の文明」に属している「時代錯誤」の人間とすることができるだろう。スウィジンが若き美青年であることを強調するハーディが、現代の申し子とも言えるクリムと対照的な存在として描いていることは間違いない。スウィジンは「人生は耐えるべきものという考え方」とは無縁の「無意識の原始的エデンの園」(13)の住人であり、クリムとは正反対の「一切、顔の曲線を乱したり、精神的な心労の印を体のどこかに表したりすることなく生きている男」なのだ。

だが、このスウィジンも「無意識」の状態ではいられなくなるような経験をする瞬間がある。それは彼が「天文学的新発見」を発表しようとしたときのことである。不運にも他の天文学者に先を越されてしまったスウィジンは絶望して死の床に伏せてしまう。

そのときこの若者は、全人生を捧げると誓ってきた科学の女神が、お返しとして、わずか一時間ですらこの絶望しきった自分を支えてくれないことを知った。実際、この小悪魔のような状況は、七十歳の科学者だったならともかく、彼にとっては真新しい経験だった。死んでしまいたいと激しく願いつつ、彼は道から少し離れたところにあるヒースの茂みに身を投げ出し、この雨に濡れたベッドの上にじっとしたまま、時が過ぎ去ることなど気にもかけないでいた。

ついに、完全に悲嘆にくれ疲れ果てた彼は、眠りに落ちた。(62-63)

このときスウィジンは生まれて初めて「小悪魔のような状況」を経験し、「激しい死への願望」を抱く。ここで彼が直面している不運は、クリムが直面していた現代人の悲劇となる可能性があるものだが、結果的に、彼はその悲劇を免れ、病気を克服してしまう。なぜなら、この時、タイミングよく彗星の到来という天文学的な出来事が起こり、「生きてこの新しい現象を見たいという強烈な願いが、ここまで嘗めていた生きることへのひどい疲労感に取って代わり、彼に新たな生命力を与えた」(67) からだった。つまり、新たな科学的発見の可能性が、あのクリムのような現代人が失った「初期の文明には強かった存在への熱意」を蘇らせ、彼を救ったのだ。

これはあまりにタイミングの良すぎる出来事に見えるかもしれないが、実は、スウィジンは挫折して絶望寸前までいき、科学への情熱を失いかける瞬間は、これ以外にも何度か起きている。例えば物語の第五章、彼がわざわざロンドンで購入してきた「科学に多大な助けとなる」対物レンズを落として壊してしまったときのことである。このレンズに全財産を使っていたスウィジンは「僕は世の中を敵にまわしてしまったんだ。世の中が元々持っている力に加えて、偶然の力まで味方につけてしまったら、僕にどんなチャンスがあるというんだ！」と嘆き、語り手も「こうした逆行の運命との戦いで、彼の悲惨さはその強さと種類においてパリシーと同様のものではあった」と述べる(37)。しかし、彼は夫人に新しいレンズを買ってもらうことでこの不幸を乗り切り、再び科学に情熱を注ぐようになる。あるいは、「僕は王立天文台長の名誉と地位を目指します。でも、そこまで生きていることはないでしょう」、「時間は短く、科学は無敵です」と、「科学的な情熱と万事人間的な事象に対する憂鬱な不信感が混ざった感情」(11)を吐露したときも、夫人が「彼の研究に適切な道具」(10)である赤道儀を買ってあげることで、まともや天体観測に打ち込むようになる。スウィジンは貧しさの中で絶えず現実と直面する危険に曝されているのであり、科学と雖も、現実と切り離されているわけではなく、彼を絶望させ得るものなのである。しかし、こうした「逆行の運命」や「憂鬱な不信感」といった、クリム的な目覚めをもたらすきっかけとなり得るものも、一旦、クリアしてしまえば、科学はこれまで通り、当たり前のように彼の情熱を掻き立て続けることになるのだ。

このように見ていくと、スウィジンは成長の可能性がないのではなく、ただ、運よく科学に従事し続けることができているだけと言えるのが分かるだろう。実際、彼が変化をしていると言える場面がないわけではない。物語の終盤、彼は夫人と別れ、新たな天文学的発見を求めて南半球に向かう。それは彼の科学者としての出世を邪魔したくないという夫人が、自分の感情を抑えてでも旅立たせるという自己犠牲的な行為に出たからだった。この時、これ

まで変わる事のなかったスウィジンが、「あなたが私を知る前に、私の気弱さを知る前に決めていた進路を、これ以上は邪魔しないと誓った」と言う夫人の決意の固さを目の当たりにして「畏怖の念」を感じ(223)、さらには「初めて、……ヴィヴィエットには彼の知らない別れの理由があったのかもしれないという考えが心をよぎった」とされる。ここでスウィジンは、コンスタンティン夫人の感情を理解し始め、彼なりにではあっても、人間的な成長の兆しを見せていることが窺われよう。にもかかわらず、この時の語り手は、「スウィジンは人間性に関する事以外なら、自然や生命に関するすべての点で、巨人のようにしっかりしていたが、世俗的なことでは年少者に過ぎなかった」のであり、「どうしようもなく今ある計画が自分以外の他人に及ぼす影響について十分な関心も払わず、一切考えもしない男子学生の気質」から抜け出ていないとするのだ。結局、スウィジンは目の前にある南半球への「科学的巡礼」に関心を向け、コンスタンティン夫人の苦悩から目を背けてしまうことになる。しかし、スウィジンが彼なりに夫人の感情を理解し始めていたことも間違いないのだ(223-225)。

スウィジンは科学への情熱を失わない代わりに、人間的成長ができないとされるが、ここでの変化の兆しに見られるように、決して成長ができない存在などではない。むしろ、不自然なくらい科学が都合よく切り札のように現れて、その不自然さを隠すように、語り手が科学者スウィジンに対する批判を繰り返す、彼の成長の可能性を奪っているとさえ言える。しかし、実のところ、こうした不自然さこそ、彼の人並み外れた若さと科学に対する情熱の本質を示していると言えるのだ。ここでハーディは科学をスウィジンの人間的成長を妨げるものとして批判的に描いているだけに見えるが、それは見方を換えれば、彼は科学によって現代的な苦悩を免れた「精神的な心労の印」のない美青年という現実離れした存在であり続けていることを意味する。コンスタンティン夫人は「すべての発見の背後には、その十倍もの発見が待ち構えている」(64)と言っていた。『塔の上の二人』では、科学は無尽蔵に拡大し続ける力を持つものとされ、科学に魅了される者に永遠に尽きることない活力の源を与え続ける。スウィジンも変光星から彗星に、そして南半球へと、その科学的な発見を求めていき、静止することのない科学的進歩に歩調を合わせていくことができる。彼がギリシア神話から抜け出たような美青年という時代錯誤的な地位から失墜することがないのも、科学から刺激を受け続け、「存在への熱意」を失うことがないという不自然な状況が可能になっているからに他ならない。その結果、彼は現代的な病に冒されることもないが、人間的な成長もない神話的な存在であり続けているのだ。そして、この不自然な地位を守るべく手助けをしているのが、他でもないコンスタンティン夫人なのである。

III

ページは『塔の上の二人』を「寓話かおとぎ話」として、コンスタンティン夫人のことを、そうしたおとぎ話やロマンス詩に登場するヒロインとしていた (Page, xix)。だが、ページ自身も指摘している通り、彼女は間違いなくヴィクトリア朝に生きる女性であり、直面する問題を解決する方法もヴィクトリア朝の女性のものである。サイモン・ガトレル (Simon Gatrell) は、この物語では「伝統的なおとぎ話の取り決めがひっくり返されて」いるとし、そうしたヒロインたちが誰かによって塔に監禁されているのに対し、夫人は自ら「冒険を求めて」塔に入り込んでいくと指摘している (Gatrell, 78)。確かに、彼女は自ら塔という「あの崇高なミステリーの神殿」の「司祭」(55) として「崇高な主題」(48) に従事する魅力的な美青年スウィジンを見つけ出し、そして彼女のロマンティックな物語世界を築き上げていく。コンスタンティン夫人には、どこか芝居染みたところがあるが、こうした自己劇化とも言うべきところが、そのような印象を作り出していると言えよう。彼女が塔に登ってみたいと思ったのも、どうにかして日々の「死ぬほどの退屈さ」を紛らしたいという切なる願いからであり、そのためには「彼女は不幸さえ歓迎したことだろう」(5) と言い得る状況にあったからだ。現在の社会的束縛から逃れたいと思っている夫人にとって、「研究に従事する科学者であり、神話、伝説、あるいはおとぎ話の中の人物でもある」(Pinion, xxi) スウィジンは、「彼女自身と絶望との間の魅力的な小さな挿話」(46) を提供してくれる存在だったのだ。そして塔の外の世界にある「彼女の以前の孤独な生活」(52) から解放された「美しい寓話」(116) へと入り込むことを可能にしてくれるのだった。

天体は人間の生きる世界から遠く離れた場所に存在する。『塔の上の二人』において、ハーディはそうした天体を研究対象とする天文学を、ロマンティックな学問であると同時に、人間社会から隔絶された非現実的な学問の代名詞として用いている。夫人と、二つの血を受け継いだスウィジンとの間にある超えることのできない階級の差も、天文学を通すことでその差は消滅してしまう。夫人は「屋敷の女主人が小姓に対するように、雇い主がその扶養人に対するように」接しようとスウィジンのところにやって来るが、「哀れなほど人間的なもの」に捕らわれている彼女は「偉大なこと」に取り組む「彼が頭上から彼女のところへ引き下ろした広大さを前にすると、二人は気付かないうちに対等になっていた」(31)。科学はコンスタンティン夫人にとっても、「彼女の悩みを驚くほど減らしてしまう」力を持った「万能薬」なのであり、彼女を社会的束縛から解放することができるのだった。

しかし、現実には、このスウィジンも決して外界の影響を免れた安泰なものではなく、彼の美しさや無垢な状態も、「お追従、甘言、快楽、さらには甚だしい繁栄」(13) といった、

いかにも現世的な「多くの誘惑」(152)に常に取り囲まれ、未だにそうした状態を維持していることが奇跡とも言えるものであった。コンスタンティン夫人はそうした問題からスウィジンを守ろうと、彼と現実との間に立ちはだかる。スウィジンに塔の使用を許可するのも、赤道儀を購入してやるのも、南半球に行けるように取り計らうのも、そして何より、彼女が彼から身を引こうとすることも、全てこうした現実的な問題から彼を守り、科学に専念できる環境を確保するためである。スウィジンの目覚めは、実は夫人がその大きな原因となり得るのであり、無垢な「エデン」の住人であるスウィジンに対して、彼女は「イヴの娘」(40)なのだ。夫人が何度も繰り返していた通り、彼女自身が彼の墮落を引き起こす原因になり得るのであり、そうした事態は彼女が最も恐れたことであった。何と云っても、「彼の広大でロマンティックな努力が彼という人間に力と魅力を与えていた」(31)のであり、夫人はスウィジンが現実社会と遠く離れたところで、天文学という「崇高な主題」に従事する美青年であることを求めているのであって、必ずしも、科学を捨てて彼女に関心を向けることを望んでいたわけではないのだ。「人間的な悲劇というつかの間の些事」(32)を抱えた彼女の愛情に気づき、彼女のことを理解することは、二人の社会的な立場や彼女の老いといった現実的な問題と対峙することを意味する。そうなってしまえば、ロマンティックでおとぎ話のような関係を可能にしてくれるスウィジンではなくなり、彼女が築き上げた寓話的な世界を自ら崩壊させてしまうことになる。彼女がスウィジンに近寄ろうとすると同時に、遠ざかろうとする矛盾の間で苦悶するのも、天文学に従事する「司祭」としてのスウィジンを求めているにも関わらず、自らが彼の墮落の原因となってしまうというジレンマに陥っているからだ。

実際、彼は年齢が若過ぎたばかりでなく、性格的にも、文字通りで融通がきかず、直接的で、妥協できないところがあり、コンスタンティン夫人のような女性を理解できなかった。そして以前から予想されていたように、彼女は彼のそうした限界に苦しめられることになった。(245)

ここで語り手は、若き科学者スウィジンには「文字通りで融通がきかず、直接的で、妥協ができないところ」があるため、理屈だけではどうにもならない人間的な部分に対する理解が足りず、「コンスタンティン夫人のような女性」を理解することができないとする。しかし、「スウィジンはどうしようもなく彼女の年下だった」(259)という事実は、実は、コンスタンティン夫人が最も彼という存在に求めたことであり、「夫人のような女性」を理解できないスウィジンの「限界」と言われているものこそ、夫人が守ろうとしたものなのだ。

次の引用は1882年の秋、ちょうど『塔上の二人』の執筆が終了したハーディが、分冊本

の出版準備をしているところに書いたコメントである。

「数年前、初めに約束したことを実際には何も保障してくれない世界に自分が生きていくと分かって以来、私は理論というものにほとんど煩わされていない…。完全な合理性に基づいた展開というものが純粋な数学という狭い領域に限られた世界では、私はその日その日を暫定的なことで満足する」(Life, 155)

このコメントでハーディは「完全な合理性」は、「純粋な数学という狭い領域」でしか存在しないと述べているが、ここで言う「合理性」は科学的思考と言い換えてよいだろう。つまり、合理的な思考が数学のように純粋に科学的であればあるほど、その適用範囲は狭まって、人間が生きる日常的なレベルからは遠ざかり、現実離れした理論上の存在になってしまうのだ。ここでのハーディの科学に対する姿勢は批判的というよりも、かつては信じていたが今では失望してしまった、というものである。そして、この「完全な合理性に基づいた展開というものが純粋な数学という狭い領域に限られた世界」にしか存在しないような「科学」とは、まさに『塔の上の二人』における科学者スウィジンの、「文字通りで融通がきかず、直接的で、妥協ができないところ」そのものだということも見て取れるだろう。ハーディは、スウィジンという科学者の姿を、「最初に約束してくれたもの」を与えてくれることはない科学と重ね合わせ、科学に対する期待と失望という複雑な感情を、コンスタンティン夫人を通して描き出したのだろう。つまり、そうした感情が、スウィジンに近寄りたいという衝動を抱きつつも、近寄ってはいけないという気持ちの間で苦悶する夫人の姿を通して示されているのだ。『塔の上の二人』は決して単なるハーディの科学批判の物語ではなく、彼の失望の物語と言うべき作品なのである。

IV

結局のところ、スウィジンに対する語り手の批判的なコメントも、クリムのような現代的な苦悩を経験することがないように、そうした環境を整え、現実的には存在し得ない神話的な雰囲気を漂わせたスウィジンを守ろうとする夫人の視線に重なり合うことで意味を持つことになる。語り手は、物語の前後を分けるまさに中間点まで、科学一辺倒のスウィジンに、触れるに触れられぬ夫人の心境に寄り添うようにして、その姿を描いていく。そして、スウィジンがようやく目覚めたと思った途端に、彼の科学者としての姿勢に対する痛烈な批判を開始する。それは触れてはならないものに触れてしまった夫人の悲劇的な予測が現実となっていく過程を盛り立て、スウィジンがいつかは失望をもたらす存在であることを浮き彫りにし

ていく。それは最終的に、彼が彼女の望んだおとぎ話の主人公などではなく、現実的な存在であることが顕在化することを意味する。事実、スウィジンは、決していつまでも現実的な問題から解放された存在であり続けることはできないのだ。

南半球に旅立ったスウィジンは、コンスタンティン夫人からの手紙で、彼女が彼の子どもを身ごもっていたことを知る。そして、ここまで夫人が楯となってくれたおかげで、彼が現実的な問題に対峙することなく、科学者としての将来の出世に向かって邁進することができていたことを悟る。こうして、これまで直視することのなかった決定的な事実を前にしたスウィジンは、次のように感じるのだった。

最初、スウィジンは彼女への憐みの気持ちで急激に胸がいっぱいになった。その後、彼は彼女がしたことと、自分自身の行動との関係に恐怖心で真っ青になってしまった。彼は知らない内に悲劇の従犯者になっていたことを知った、覚醒した夢遊病者のような気持ちになった。(247)

ここでの「夢遊病者」という表現は、通常なら直視して当たり前だった現実を、今になって目の当たりにすることになったスウィジンの状態を的確に言い表したものと言える。この時、彼は「世界が思っていたよりも異質な場所」であることに気付き、「年齢、気質、そして状況のせいで、その異質さに驚いている傍観者以上のものになることを排除されている人」(248)のように感じたと言われる。それは、これまで現実から疎外されてきたスウィジンが、突然、自分がその現実の真っ只中にずっといたことを悟ったことを示しており、こうした状況を作り上げるのに、コンスタンティン夫人が大きな役割を果たしてきたのだ。

こうしてようやく目覚めたスウィジンも、南半球の天体を目の前にすると、「子どものような単純な喜び」から「地上のもの」に関心を向けずに「頭上の変化」にばかり注意を向けてしまう(248-249)。しかし、数年後、ケープでの仕事を終えてイングランドに戻ってきた彼は、「もし彼女が本当に彼に対する以前の愛情を少しでも抱いているのなら、彼女のもとを訪ねないのは残酷極まりないことだ」(257)と感じ、かつての密会の場所である塔に赴いていく。スウィジンの行動や夫人への感情は、依然として真っ直ぐに彼女のもとへと向かうことにはないが、これまでのような「無意識の原始的エデンの園」の住人ではなくなっていることも確かである。だが、ようやくコンスタンティン夫人の前に戻ってきた彼ではあるが、別人のように「彼女のやつれて衰えてしまった顔」を見て衝撃を受けてしまう。そして、それに気付いた夫人の「あなたは私を愛してはいません」という言葉を否定することもできず、一旦は彼女のもとを立ち去ってしまう(259)。それでも、スウィジンは以前のスウィジンではない。

ケープ・タウンを去る前に、彼は次のように決意をしていた。つまり、もし彼女が彼と結婚するつもりがあるなら、ただちに滞ることなく結婚しようと。彼女には道徳的に負うところが大きいのであり、彼は物事を済る男ではなかった。戻ってきたスウィジンは旅立って行った時のスウィジンとは全く違っていたし、かつて愛したようには彼女を愛することはできなかった。しかし、彼に対する彼女の行為は純粋な慈愛によるものであったのであり、あの「自分の利益を求めない」寛大さによるものだったと信じていた。そこで彼は彼女に優しい慈愛の心で接したいという願いから怯むことはなかった。もしかすると、それは長い目で見れば恋人の示す愛よりも価値があるとされる感情かもしれない。 (260-261)

スウィジンがコンスタンティン夫人に対して犯す最大の罪は、老いた夫人に幻滅することかもしれない。避けることのできない老いという現実、夫人が物語の初めから恐れてきたものだった。しかし、スウィジンはこの夫人が恐れ続けた現実を前にして、一度は怯みながらも「道徳的」な気付きに至り、かつて示した愛情とは違った「長い目で見れば恋人の示す愛よりも価値があるとされる感情」を持って夫人のもとに戻る決心をする。この決意はスウィジンの決定的な人間的成長を意味するが、果たして、このような「道徳的」な愛情が夫人の求めるものであったらだろうか。スウィジンを科学というユートピアに留まらせ、クリムのような成長を経験することを阻止するために苦心した夫人である、それは受け入れ難い現実だったはずである。だとすれば、スウィジンが道徳的な義務感から戻ってきたことも、夫人にとっては彼の遅すぎる目覚めというよりも、実は、彼女のロマンスの終焉を告げるものであったと言わざるを得ないだろう。この後、「突然の喜び」(262)に発作を起こした夫人は命を落としてしまう。主教の復讐とされるこの死も、最終的にスウィジンの道徳的な目覚めという現実を目の当たりにした夫人が、天上の人ではなくなったスウィジンを受け入れることを拒否した、彼女のロマンティックな冒険における最後の抵抗を示していると言っていることができるかもしれない。

結 び

このように、『塔の上の二人』はハーディの科学に対する失望が反映されているのだが、物語全体を通して、決して暗い調子で描かれてはおらず、むしろ、やり過ぎと言えそうなほどアイロニーが効いたものになっている。そのためか、科学に限らず、この物語で描かれたものに対するハーディ自身の姿勢は分かり難いものになってしまっている。それは登場人物に対しても言えることで、特に、コンスタンティン夫人に対するハーディの姿勢は同情的な

のか、それとも芝居染みた彼女の言動に批判的なのか、あるいは単に揶揄しているだけなのか非常にとらえ難い。しかし、ハーディの姿勢が何れであるかを特定することは、あまり意味をなさないことかもしれない。なぜなら、科学に失望したハーディがたどり着いた結論は、「理論」など当てにすることができず、あらゆるものが「暫定的であること」で満足する以外にはないというものだったからだ。夫人の期待と失望を描き出していく語り手が彼女との間にとる距離感も、ある時は賞賛であったり、ある時は冷笑的であったり、またある時は残酷でもあったりと、一定することはない。それは全てが「暫定的であること」以外にはないという結論に達したハーディの姿勢を反映するかのようになり、決して近付き過ぎることもなく、かといって突き放すわけでもなく、読者を前にもてなすことに徹した語り手が、その時々々の印象を、それぞれの場面に応じて放逸と思えるほど自由に描いているときえ言えるものだ。この小説の後、ハーディは『キャスタブリッジの町長』(*The Mayor of Casterbridge*, 1886)に始まる悲劇的な小説群を執筆していく。そういった意味でも、この『塔の上の二人』のようなアイロニカルで、軽快とも冷笑的とも言える小説は、彼の小説家としてのキャリアにおける分岐点を印す作品であり、かつてトロロープ (Anthony Trollope) やリットン卿 (Lord Bulwer-Lytton) の小説を夢中になって読んだという彼の、ひとつの到達点を示していると言えよう (*Life*, 51-52)。だが、それは喜劇から悲劇へという単純な方向転換を意味するのではなく、むしろ、こうした喜劇的要素は、ハーディの作家人生を通し、一貫して重要な役割を果たすことになるのだ。

Works Cited

- Gatrell, Simon. 'Middling Hardy' in *Thomas Hardy Annual No. 4*, ed. Norman Page, Basingstoke: Macmillan, 1986. 70-90.
- Gibson, James, ed. *Thomas Hardy: The Complete Poems*, Basingstoke: Macmillan, 1976.
- Hardy, Florence Emily. *The Life of Thomas Hardy*. Basingstoke: Macmillan, 1962.
- Hardy, Thomas. *The Return of the Native*, ed. Tony Slade. London: Penguin Books, 1999.
- Hardy, Thomas. *Two on a Tower*, ed. Sally Shuttleworth. London: Penguin Books, 2000.
- Millgate, Michael. *Thomas Hardy: His Career as a Novelist*. Basingstoke: Macmillan, 1971.
- Page, Norman. "Introduction" to *Two on a Tower*. ed. Norman Page. London: The Everyman Library, 1999.
- Persoon, James. *Hardy's Early Poetry: Romanticism Through a 'dark Bilberry Eye'*. Boston: Lexington Books, 2000.
- Pinion, F. B. *A Hardy Companion*. Basingstoke: Macmillan, 1968.
- Purdy, Richard Little. *The Collected Letters of Thomas Hardy* vol. 1. Oxford, 1978.
- Taylor, Richard H. *The Neglected Hardy*. Basingstoke: Macmillan, 1982.

Summary

A Study of *Two on a Tower*

—Hardy's Changing Attitude towards Science—

Toshiaki Endou

Thomas Hardy's ninth novel, *Two on a Tower*, has been often criticized as its main material, astronomy, is not effectively integrated into the story, even though he explained in his letter to Edmund Gosse, 'what I have aimed at (is) to make science not the mere padding of a romance, but the actual vehicle of romance,' or in the 'preface' that he added in 1895 he confessed his 'wish to set the emotional history of two infinitesimal lives against the stupendous background of the stellar universe' to show readers 'the smaller might be the greater to them as men.'

The astronomer Swithin St. Cleeve is said to have devoted his whole life to the science until he notices his de facto patron, Lady Constantine's love for him. This romantic awakening seems to mean that he has begun to show 'the essential human quality,' though, at this very moment, the narrator of the story starts vitriolic criticism against Swithin as the scientist and repeatedly traces out his crucial want of human quality. Some critics, such as Taylor, hold that here Hardy denounces the excessive rationalism of science, but then it means that Hardy goes against his professed wish to show the 'contrasting magnitudes' of the two.

In this thesis, I re-examined the role of science in the story, and tried to show Hardy's changing attitude towards science.